

## 家族周期の移行パターンによる老後意識の差異

—1982年、93年、95年の農村中高年既婚女性の追跡調査より—

○常葉学園大教育 佐藤宏子

**目的** 農村家族において、1982年から95年の13年間に生じた直系家族の家族周期段階への回帰、停滞、逸脱の移行パターンによって、老後意識にはどのような差異が認められるかを明らかにする。

**方法** ①大量調査：1982年7月、静岡県志太郡岡部町朝比奈地域において30～59歳の有配偶女性475人の訪問面接調査を実施した。次いで、93年7月追跡調査を実施し324人からの回答を得た。②事例調査：1995年8月、82年と93年の両調査に回答した対象者のうち〔A世帯〕：11年間に直系家族の周期段階へ回帰（37人）、〔B世帯〕：あとつぎの結婚難によって直系家族の周期段階への移行が停滞（42人）、〔C世帯〕：直系家族の周期段階から逸脱、及び逸脱の可能性が高い（36人）、〔D世帯〕：82年、93年ともに「他出なし」「他出始まる」（48人）、〔E世帯〕：82年時点で直系家族の周期段階に回帰済み（17人）、の家族周期移行パターンの世帯に属する180人を対象に事例調査を実施した。

**結果** ①家族周期移行パターンによって、「既婚子との同別居希望」「同居既婚子との居住形態—家計の共同・分離」「老後の生計維持の方法—不自由になった時」「不自由になった時の世話の担当者」が大きく異なる。②82年、93年の両時点において「一貫同居」「長男同居」「既婚子との住宅・家計・食事の共同」を希望する者はB世帯に最も多い。③不自由になった時に「子供による扶養」と「長男の嫁の世話」を希望する者は、E世帯に最も多く、次いでA・B世帯の順である。これに対して、C・D世帯では「年金・恩給等」の希望者が多く、「長男の嫁の世話」になることを希望する者が少ない。